**とりそこなった電話(Missed Call) 3/26/17**

**ヨハネ 9:1-41 スティーンストラ牧師**

2017年の大リーグシーズンの始球式まであと一週間をきった。どこでそれが行われようが、投げられた途端にキャッチャーのミットにおさまる独特の音が聞こえる。そして、ホームベースのすぐ裏あたりから「審判、何でそれが見えなかったのか？」などという辛らつな声が聞こえてくる。プロの審判には、ボールかストライクか、またホームに駆け込むランナーがアウトかセーフなのかの判定が完璧であることが期待される。しかし、それは私たちが電話を受け取ろうとしていても携帯電話に”Missed Call”という表示が出て電話をとりそこなったことに気づかされるかのごとく、審判も私たちと同じく必ずしも完璧な視力を持ち合わせているわけではない。そして、観衆を前に正しい判定をしそこなう。

本日の福音書の中でヨハネが指摘しているのは、自分たちの視力が完璧ではなく信じられないことだ。語り手は皮肉っぽくまたユーモアをもって、目が見えないことに対して見えることとは、そして暗いことに対して明るいこととはどういうことかをイエスの命からはっきりさせている。彼はそれを眼前にあるものなのに他のだれも見えなかったものを盲人が見えるようになる話から語っている。その物語の中で、彼はあまり心地よくない真理について教えている。それは、その中身が見えなくてもそこがどういうところかがわかっている神の国の人々のように、私たちも明らかなことと同時に見えていないことについても探し求めなければならないということだ。

ヨハネは、この見事に創られた話を、本来見えて当然のものが見えない目の障害を生まれがら持っていたがために町の人々からは罪びととみられていた一人の男性の話しからはじめている。しかし、話しの最後には彼のどうにもならなかった視力が治癒するということに驚かされるばかりでなく、もっとひどい何かに苦しんでいた大勢の人々がいたことに驚かされる。

この物語の登場人物のすべての人々は、彼ら自身が主の癒しを必要としていた人々であったことに気づいていなかった。というのは世の中で本当に何が起こっているかがわかっていなかったからである。彼らは罪人に焦点をあてていたために、弟子たちは貧しきものが神に向き直るようなことだけを対象にした実践神学を望んでおり、目の欠陥は簡単に治ってそして治癒した彼自身が、他の人々へ救いの力を与えられる人になるということを見落としていた。彼の両親はファリサイ人に対する恐れから、宗教の権威者たちと律法さえも超越して神が新しいことをされていたことを見逃していた。近隣の人々は神の力によって癒された男が彼らの町で育ったあの男と同一人物であるのかどうかわからなかった。というのはおそらく彼等は盲人の彼を生まれたその日から見下していたかじっくり見ることもなかったためだろう。そして彼等の聖書の解釈は非常に凝り固まったものであったために盲人であるということは過去に何かの律法に反する行いをしたがためということしか考えられず、安息日に神が創造の業を見せてくださるなどという福音などについて気づけなかった。そのような彼等の形式ばった敬虔な信仰では、イエスの目からは、逆に彼等が審判を受ける対象であり罪人として扱われるなどとううことは考えにも及ばないことだった。町の中でただ一人、目を大きく開けるのは以前は盲人だったあの彼だけで、彼は視力が20/20になるという祝福を与えられるだけではなく、霊的な洞察力にも恵まれてイエスによって実行された驚くべき神の御業の中で、真の世の光であるイエスの存在を認識する。

弟子たち、隣人たち、ファリサイ派の人々、そして彼の両親さえも、イエスが盲人の視力を回復させたということには気づいているが、全員それがどういうことだったのかは見落としている。これらの本来は目の見える人々は、実は彼等は広い視野はもってはいないという重要なメッセージのメモを得ることができない。

今朝は、私たちが自分たちもよく目が見えていないーそれはイエスが神がいかに人間に共感してくださっているかを示された時に、それを信じないようにする理由を探してしまうーということに気づくように招かれている。今日の物語に出てきた登場人物たちのように、私たちは皆、私たちの眼前で何が正しい事かを認識しないようにしてしまう、なぜなら私たちは神の存在が顕れたまぶしい光に目を向けるより、暗い中に生活している方がなじみがあるためにそちらを好んでしまう。暗い中にいる方が自分の罪を告白することなく人の罪を指摘しやすい。暗い中にいれば、周囲の人々の苦しみや痛みに対して近づいていって名前を知ろうとしたり愛と癒しの行動を伴って彼等が必要としているものに対応してあげようとするのではなく、彼等の苦しみ痛みをまともに見ることを避けて彼等を非人格的に扱うことが平気になってしまう。その通り私たちの視力を信用することができない人に加えられる。私たちの目が元来の目的にかなうような働きをするように、イエスによって 正してもらう必要がある。なぜならイエスについて語っているヨハネ福音書の話は、最高の野球の審判であっても、かならずしもいつも正しくないということに気づかせてくれる。

それらは感謝すべきことに私たちがしなければならないことではない。イエスは父なる神から送られ、私たちの歪んだまた過った視力ゆえに存在し続けている暗闇の中に輝かしい光をもたらしてくれた。イエスが元々目が見えなかった盲人を奇跡的に癒したように、イエスは私たちがイエスを見えずにいるあるいは見ようとせずイエスを信頼できない時に、だれに対しても同じ奇跡を起こしてくださる。イエスの十字架刑において、彼は意識的か無意識かにかかわらずイエスのことを見ようとしないすべての世の罪を取り除いて、私たちの目ばかりでなく心も、イエスの新しくまたこの上もなく豊かな命へと広げられる。　私たちがイエスが私たちのために死んでくださったという彼の無実の表情をしっかり見つめるとき、新たな明晰な視力が私たちに与えられすべてが変化しはじめる。かってはあきらかだった限られた視界はくずされていく。かっては慣れ親しんでしまっていた欠陥のある視力は、まったく新しいものに変わっていく。イエスが私たちの体中の染みをきれいにしてくださり、神がいつもそうであって欲しいという人々の集団に入って来れるようにしてくださる。　神を賛美しよう、イエスの光は暗闇の中に輝き、暗闇はその輝きに勝つことができない。　アーメン。